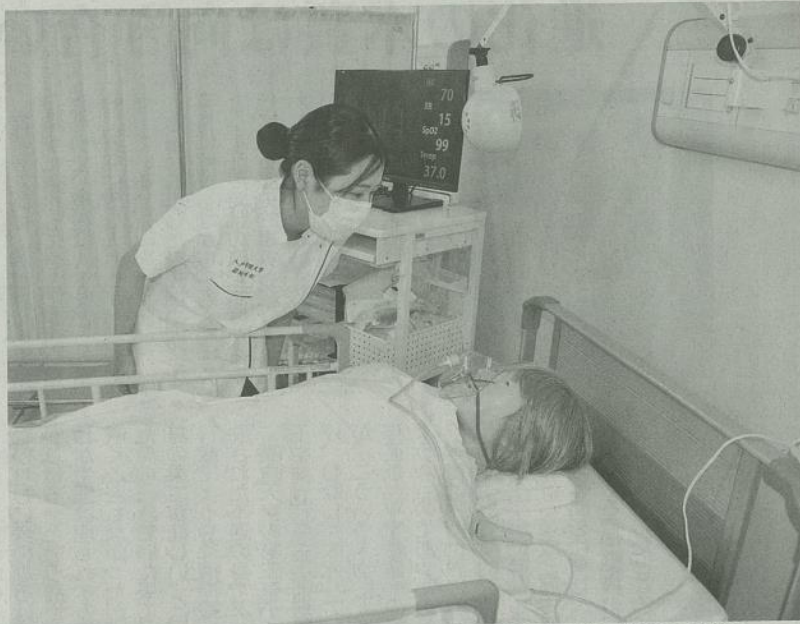


八学大看護学科医療シミュレーター活用

患者の状況リアルに体験



実習に向け何度も練習

八戸学院大健康医療学部看護学科は、学生の看護実践力を高めるため、医療シミュレーターを活用した教育に力を入れている。デジタル対応で、病棟や在宅の現場で起こる状況を体験できるシナリオを複数搭載。患者の人形は顔色の

変化や音声機能があり、コミュニケーション能力の向上にも役立つ。学生は身に付けた知識や技術を生かし、状況を判断しながら適切に実行できるかを学内で確認した上で、医療施設での看護実習に臨む。

(工藤洋平)

医療シミュレーターを活用し、患者の状況を確認する八戸学院大の学生

新型コロナウイルスの感染拡大以降、医療施設での実習が困難となる中、学内教育の充実を図るのが狙い。文部科学省の大学改革推進等補助金「ウィズコロナ時代の新たな医療に対応できる医療人材養成事業」を活用した。

導入したのは、京都科学(本社京都市)の「多職種連携ハイブリッドシミュレーター SCENARIO(シナリオ)」。手術直後の患者に対する全身状態の観察や、初めて化学療法を受ける患者への看護など、場面に応じた行動ができていくかどうかをチェックし、目標の達成状況を確認できる。

昨年6月以降、3、4年生が利用。市川裕美子准教授は「患者の人形はリアリティーがあり、場面のトレーニングになる。失敗しても繰り返し取り組むことができるのは学生にとって良いことだ」と歓迎する。

看護学科3年の菊地咲妃さん(21)は「医療施設での実習では1人の患者を受け持つが、シミュレーターではさまざまな病状や疾患を診ることができる。何度も練習したい」と意気込みを語った。